



寺崎誠三、ステップスギャラリー三度目の個展である。2011年の初回は写真と映像を披露し、2014年2月はNYCの写真に終始した。今回の主題は「Tokyo」である。NYCの際、私は寺崎の写真が時間軸を浮遊し、見る者に委ねるという趣旨の評を書いた。今回はNYCとTokyoの対比になるのかと思いきや、意外な方向へ向かった。普段訪れる東京が寺崎の視点でどのように描かれるのかという興味で画廊へ向かったのだが、展示されている写真群は「これが東京か」と感じるほどの驚きに満ちていた。寺崎は「秋の空気感を出す為に、全部の写真を撮り直した」と私に語った。確かに空気感は、独自である。

しかしそれ以上に驚いたのは、日本や東京といった田舎の感触が剥奪され、何処にも無いような、空想的な空間性が構築されたことにあった。

それは寺崎の視点が、冷徹であることを示しているのではない。寺崎が単なる写真家ではなく、未知の世界を創造する意志に満ち満ちていることを示している。

寺崎の作品を見ていると、私達は何を目指し、どこへ向かって生きていくのかを考えさせられる。それは未来が不安定であろうという即物的な発想ではない。生きること自体が、全て未確定なのだ。その未確定な未来と、どのように向き合うのが重要になっていくのではないかと。

